

令和元年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）

分担研究報告書

福島県における発達障害の気づきと支援に関する研究（南相馬市）

研究代表者 本田 秀夫（信州大学 医学部 子どものこころの発達医学教室）

研究分担者 内山 登紀夫（大正大学 心理社会学部 教授）

研究協力者 川島 慶子（福島大学 子どものメンタルヘルス支援事業推進室 研究員）

研究要旨：

本研究班の目的に加え、震災後の地域特性の変化も踏まえた“発達の偏りや遅れのある子ども”の実態の把握と支援内容について検討することを目的とし、質問紙調査を実施した。

今年度は、H18年度生まれの追跡調査として中学1年生、定点調査として小学1年生、6年生を対象学年とした。H18年度生まれの子どもの追跡調査の結果から、発達の偏りや遅れのある子どもの割合は、H25年（小1）18.9%が最も高く、H26年（小2）で10.0%に減少した。その後、H29年（小5）16.3%まで増加傾向がみられたが、減少傾向に転じ、R1年（中1）9.7%の結果となった。小学1年生の定点調査では、R1年度小学1年生の発達の偏りや遅れのある子どもの割合が26.0%（「境界域知能」を除く）であり、H25年度からの定点観測を行う中で最も高い割合となった。内訳をみると、“言葉の問題”を有する子どもが約8%と最も高い割合を示した。医療機関の受診については、震災に起因する避難等の影響や家族の理解、保護者のメンタルヘルス等、問題が重複しており、学校だけで問題を抱えることなく、地域の支援機関との連携も踏まえた支援体制づくりが必要であることが明らかとなった。

A. 概要と目的

福島県沿岸部はH23年3月11日から現在に至るまで、東日本大震災（以下、震災）後の第一原子力発電所事故の影響により、避難や帰還などによる人口変動が大きい地域である。発達の偏りや遅れのある子どもの実態とその支援ニーズを経時的に把握することは、震災に起因する地域特性も踏まえた支援ニーズの変化を確認することにつながり、今後の支援体制整備の基礎資料となることが期待される。今回は、H25年度より毎年行われてきた調査結果のうち、R1年度の調査結果について報告する。

B. 方法

本研究は、南相馬市内の全ての小学校と近隣市の特別支援学校におけるR1年度小学1年生と6年生を定点調査として、中学1年生をH18年度生まれの子どもの追跡調査の対象としてR1年12月～R2年1月に質問紙調査を実施した。

質問紙は、南相馬市教育委員会の協力を得て各小学校に配布し、返信用封筒（郵送）にて回収した。県立の特別支援学校は、同内容の質問紙を郵送にて配布回収した。質問紙の項目は、次の通りである。1) 発達の偏りや遅れのある子どもの人数と医療機関受診の有無、2) 主たる問題別の人数、3) 不

登校の人数、4) 特別な教育的配慮(支援内容別の人数)、5) 「学級担任のみの配慮」の対象児の特徴と対応(自由記述)、6) 「医療機関未受診」の子どもの特徴と対応(自由記述)、7) 震災後のストレスによる影響から支援が必要と思われる子どもの人数を記入する。

質問項目は、本研究班の共通項目 1)～4) と、独自に作成した項目 5)～7) から構成される。回答者は、各校の対象となる子どもの実態を把握している担任教諭や特別支援教育コーディネーター等とした。

(倫理面への配慮) 本研究は、福島大学の倫理指針に基づき、承認を得て行った。

C. 研究結果

質問紙の回収率は、小学校 12 校中 12 校、支援学校 1 校中 1 校でありから回答を得ており、回収率 100%であった。質問紙の結果から得られた児童数は、R1 年度小学 1 年生 288 名(男 135 名、女 153 名) 小学 6 年生 385 名(男 194 名、女 191 名)、中学 1 年生 373 名(男 193 名、女 180 名)であった。

発達に何らかの偏りや遅れのある子どもについて、主たる問題別に全児童生徒数に占めるそれぞれの割合と医療機関の受診の割合を学年別に表 1 と表 2 に示す。

1) 発達の遅れや偏りのある子どもの割合(合計) [表 1、表 2、表 3 参照]

各学年の“発達の遅れや偏りのある子ども”の割合は、主たる問題別の合計より、小学 1 年生 28.5% (男 35.6%、女 22.2%)、小学 6 年生は 15.6% (男 20.1%、女 11.0%)、中学 1 年生 10.7% (男 17.1%、女 3.9%) で

あった。

その内、学校が医療機関の受診を把握している子どもの割合は、小学 1 年生 6.9% (男 12.6%、女 2.2%)、小学 6 年生 4.2% (男 5.7%、女 2.6%)、中学 1 年生 8.0% (男 12.4%、女 3.3%) であった。

未受診の子どもの割合は、小学 1 年生 21.5% (男 23%、女 20.3%)、小学 6 年生 11.4% (男 14.4%、女 8.4%)、中学 1 年生 2.7% (男 4.7%、女 0.6%)

2) 主たる問題別の割合 [表 1、表 2、表 3 参照]

・小学 1 年生

“医療機関の受診あり”では、「対人関係やこだわり等の問題(自閉症等)」2.4%、「落ち着きがないそそっかしい等の問題(ADHD 等)」3.1%、「発達全体の遅れ(精神遅滞等)」1.0%、「言葉を理解すること話すことの問題(構音障害等)」0.0%であった。

“医療機関未受診”では、「対人関係やこだわり等の問題(自閉症等)」2.4%、「落ち着きがない、そそっかしい等の問題(ADHD 等)」3.1%、「発達全体の遅れ(精神遅滞等)」3.1%、「言葉を理解すること話すことの問題(構音障害等)」が 8.0%であった。

・小学 6 年生

“医療機関の受診あり”では、「対人関係やこだわり等の問題(自閉症等)」2.6%、「落ち着きがない、そそっかしい等の問題(ADHD 等)」1.0%、「言葉を理解すること話すことの問題(高温障害等)」0.0%、「発達全体の遅れ(精神遅滞等)」0.0%、「その他何らかの精神的なケアを要する(チック、緘黙等)」0.0%であった。

“医療機関未受診”では、「対人関係やこだ

わり等の問題（自閉症等）」2.1%、「落ち着きがない、そそっかしいなどの問題（ADHD等）」3.1%、「言葉を理解すること話すことの問題（構音障害等）」1.0%、「全体的な発達の遅れ（精神遅滞等）」0.8%、「その他何らかの精神的なケアを要する（チック、緘黙等）」2.1%であった。

・ 中学 1 年生

“医療機関の受診あり”では、「対人関係やこだわり等の問題（自閉症等）」4.3%、「落ち着きがない、そそっかしい等の問題（ADHD等）」2.1%、「言葉を理解すること話すことの問題（構音障害等）」0.0%、「発達全体の遅れ（精神遅滞等）」1.1%であった。

“医療機関未受診”では、「対人関係やこだわり等の問題（自閉症等）」0.5%、「落ち着きがない、そそっかしいなどの問題（ADHD等）」0.0%、「言葉を理解すること話すことの問題（構音障害等）」0.0%、「全体的な発達の遅れ（精神遅滞等）」0.5%であった。

3) 反抗挑戦性障害について[表 4、表 5、表 6 参照]

発達の遅れや偏りのある子どもの中で、反抗的な特性（しばしば、イライラし、腹を立て、癩癩を起こしたり、大人の要求や規則に逆らうなど著しく反抗的な特性を有すると思われる子ども；反抗挑戦性障害の特性）がある子どもの人数と割合について、問題種別、医療機関の受診の有無別で示した。

※診断の有無は問わず、上記の内容が該当すると思われる子どもについて教師が把握する範囲で回答を得ている。

・ 小学 1 年生

発達の遅れや偏りのある子どもの中、反抗挑戦性障害の特性を有すると思われる子

どもは、全体で 9 名（3.1%）であった。医療機関の受診については、「受診あり」6 名（2.1%）、「未受診」3 名（1.0%）である。

主たる問題の内訳をみると、「対人関係やこだわり等の問題（自閉症等）」5 名（1.7%）、その内、医療機関を受診している子どもは 3 名（1.0%）である。「落ち着きがない、そそっかしい等の問題（ADHD等）」2 名（0.7%）であり、いずれも医療機関を受診している。

「発達全体の遅れ（精神遅滞等）」1 名 0.3% であり医療機関を受診している。「境界域知能」1 名（0.3%）については未受診であった。

・ 小学 6 年生

発達の遅れや偏りのある子どもの内、反抗挑戦性障害の特性を有すると思われる子どもは、全体で 2 名（0.5%）であった。医療機関の受診については、「受診あり」2 名（0.5%）、「未受診」0 名（0.0%）である。

主たる問題の内訳をみると、「対人関係やこだわり等の問題（自閉症等）」1 名（0.3%）、「落ち着きがない、そそっかしい等の問題（ADHD等）」1 名（0.3%）であった。

・ 中学 1 年生

発達の遅れや偏りのある子どもの中、反抗挑戦性障害の特性を有すると思われる子どもは、全体で 8 名（2.1%）であった。医療機関の受診については、「受診あり」8 名（2.1%）、「未受診」0 名（0.0%）である。

主たる問題の内訳をみると、「対人関係やこだわり等の問題（自閉症等）」4 名（1.1%）、「落ち着きがない、そそっかしい等の問題（ADHD等）」3 名（0.8%）、「発達全体の遅れ（精神遅滞等）」1 名 0.3% であった。

4) 素行障害について[表 7、表 8、表 9 参照]

発達の遅れや偏りのある子どもの内、素行障害の特性(特性触法行為;暴行、器物破損、放火、窃盗、家出、街の徘徊などの触法行為を行ったこと)のある子どもの人数と割合について、学年別に示す。

小学1年生では、いずれの発達障害特性のある子どもにおいても0名(0.0%)であった。小学6年生では、「落ち着きがない、そそっかしいなどの問題(ADHD等)」1名(0.3%)のみであった。中学1年生は0名(0.0%)であった。

5) 不登校について[表 10、表 11、表 12 参照]

発達の偏りや遅れのある子どもの内、不登校(30日以上長期欠席)の状態にある子どもの全体に占める割合を学年別に示す。小学1年生は、「対人関係やこだわりなどの問題(自閉症等)」1名(0.3%)、「学力の問題(LD等)」1名(0.3%)、発達全体の遅れ(精神遅滞等)1名(0.3%)、その他は全て0名(0.0%)、合計で3名(1.0%)であった。小学6年生は、「その他何らかの精神科的なケアを要する(チック、緘黙等)」1名(0.3%)、その他は全て0名(0.0%)、合計1名(0.3%)であった。中学1年生は、「対人関係やこだわりなどの問題(自閉症等)」3名(0.8%)、「落ち着きがない、そそっかしいなどの問題(ADHD等)」1名(0.3%)、合計4名(1.1%)であった。

5) 特別な教育的配慮[表 13 参照]

学校教育において支援・配慮が必要な子どもの人数と全児童数に占める割合について学年別で示す。

・小学1年生

「学級担任による配慮のみ」12.2%(男12.6%、女11.8%)が最も高く、次いで「難聴・言語障害通級指導教室」7.7%(男8.1%、女7.2%)、「その他の支援」3.5%(男3.0%、女3.9%)、「特別支援学級(知的障害)」2.1%(男3.7%、女0.7%)であった。

・小学6年生

「学級担任による配慮のみ」5.7%(男7.3%、女4.2%)最も高く、次いで「特別支援学級(知的障害)」1.6%(男2.1%、女1.0%)、「特別支援学級(情緒障害)」1.3%(男2.6%、女0.0%)、「その他の支援」1.0%(男1.0%、女1.0%)、「難聴・言語通級指導教室」0.5%(男0.5%、女0.5%)であった。

・中学1年生

「学級担任による配慮のみ」4.3%(男7.4%、女1.1%)最も高く、次いで「特別支援学級(知的障害)」1.9%(男2.1%、女1.7%)、「特別支援学級(情緒障害)」1.1%(男1.6%、女0.6%)、「その他の支援」0.5%(男1.1%、女0.0%)、「難聴・言語通級指導教室」0.0%(男0.0%、女0.0%)、「適応指導教室」0.5%(男1.1%、女0.0%)であった。

6) 学級担任による配慮のみの子どもの特徴と支援内容(自由記述)[表 15 参照]

本項目の回答は自由記述形式であり、回収済みアンケートから得られた有効回答は、小1では13校中9校、小6は13校中5校、中1は7校中6校であった。

回答内容は、ケースや特性ごとに分類し、類似する内容はまとめて表記し、件数を示した。個人が特定されることがないように、適宜詳細な内容は削除した。

小学校1年生では、集団行動、集団活動

への参加において、気持ちの切り替えや周囲に合わせた行動が難しい状態の子ども、コミュニケーションの苦手さがある、自分の気持ちを表現することの難しさ等の問題を抱える子どもに対して、その都度、声かけ、指示、個別の関わりをするといった支援が中心であった。

小学6年生では、学習への集中、指示の入りにくさ、対人関係のトラブル、ぼんやりする、整理整頓、多動等が特徴としてあげられ、2次的な問題である不登校傾向もみられるはじめる。支援は、視覚的な支援、個別の声かけ、個別の指導、共感的なかわりが行われていた。

中学1年生では、自閉症特性に加えて、授業への参加の難しさや攻撃性、集団への適応の難しさ、震災の影響、家庭環境の問題等、いくつかの問題が重複する様子がみられる。支援としては、保健室登校、個別の学習指導、対人関係のトラブルの防止や対処、スクールカウンセラーの活用などが行われている。

7) 医療機関を受診しない子どもの特徴と対応 (自由記述) [表 16 参照]

本項目の回答は自由記述形式であり、回収済みアンケートから得られた有効回答は、小1では13校中7校、小6では13校中6校、中1では7校中3校であった。

回答内容は、ケースや特性ごとに分類し、類似する内容はまとめて表記し、件数を示した。個人が特定されることがないように、適宜詳細な内容は削除した。

小学1年生、小学6年生、中学1年生それぞれにおいて共通する内容は、発達の遅

れ、学習の困難さ、日常生活上の問題などがあるものの、家庭環境の問題、保護者のメンタルヘルスの問題、家族の理解の難しさにより医療機関の受診の難しさがあった。また、学校における対応として個別の指導、スクールカウンセラーの活用があげられたが、課題として、校内全体の理解や合理的配慮の推進を指摘する意見もあった。

8) 震災後のストレス [表 14 参照]

発達障害特性の有無にかかわらず、各学年全体において、震災後のストレスから専門的な心のケアが必要と感じる子どもの人数について把握した。小学1年生8名(男4名、女4名)、小学6年生12名(男7名、女5名)、中学1年生38名(男24名、女14名)であった。

その内、スクールカウンセラーの面接を受けた子どもは、小学1年生6名(男2名、女4名)、小学6年生0名(男0名、女0名)、中学1年生23名(男11名、女12名)であった。また、医療機関を受診した子どもは、小学1年生3名(男3名、女0名)、小学6年生0名(男0名、女0名)、中学1年生11名(男11名、女0名)であった。

9) H25-R1年度の調査結果まとめ

本研究は、H25年度から7年間に渡り、H18年度生まれの子どもの追跡調査、毎年の小学1年生、6年生の定点調査を行ってきた。今年度の追跡調査の対象児は中学1年生であり、定点調査の対象児は小学1・6年生である。

質問紙の内容は、基本的には毎年同じ内容を使用しているが、H28年度より“発達の遅れや偏りのある子ども”の質問項目に

「境界域知能」が新たに加わった。そこで、H28年度以降については、「境界域知能」を除外して“発達の偏りや遅れのある子ども”の割合を算出し、表17～表19に示した。

H25年度小学1年生（H18年度生まれの子ども）の追跡調査における発達の遅れや偏りのある子どもの割合は、H25年度18.9%（医療機関を受診したと把握している（以下、受診）7.7%）、H26年度10.0%（受診5.0%）、H27年度11.8%（受診5.1%）、H28年度15.6%（受診4.7%）、H29年度16.3%（受診8.9%）、H30年度13.6%（受診7.3%）、R1年度9.7%（受診8.0%）であった。

小学1年生の定点調査における発達の遅れや偏りのある子どもの割合は、H25年度18.9%（受診7.7%）、H26年度17.4%（受診7.1%）、H27年度19.1%（3.8%）、H28年度20.2%（5.1%）、H29年度17.7%（3.8%）、H30年度15.6%（4.0%）、R1年度26.0%（6.9%）

小学6年生の定点調査における発達の遅れや偏りのある子どもの割合は、H25年度9.6%（受診5.9%）、H26年度12.0%（受診6.8%）、H27年度11.4%（4.4%）、H28年度9.4%（4.3%）、H29年度14.6%（8.3%）、H30年度13.6%（7.3%）、R1年度14.0%（4.2%）であった。

D. 考察

1) 発達の偏りや遅れのある子どもについて

・発達の偏りや遅れのある子どもの割合の変化について

H18年度生まれの子どもの追跡調査の結果から、発達の偏りや遅れのある子どもの

割合は、H25年（小1）18.9%が最も高く、H26年（小2）で10.0%に減少した。その後、H29年（小5）16.3%まで増加傾向がみられたが、減少傾向に転じ、R1年（中1）9.7%の結果となった。

定点調査の結果は、小学1年生ではR1年26.0%と急激な増加がみられた。しかし、医療機関を受診していると把握する割合は6.9%であり、H25年度、H26年度の7%と類似する。つまり、医療機関未受診の発達障害の疑いのある子どもの増加が推測される。

表1（小学1年生の結果）における内訳（主たる問題）をみると、「言葉を理解すること話すことの問題（構音障害等）」が8.0%と最も高く、次いで「落ち着きがない、そそっかしい等の問題（ADHD等）」が6.3%、「対人関係やこだわり等の問題（自閉症等）」が4.9%、「発達全体の遅れ（精神発達遅滞等）」が4.2%であり、“言葉の問題”が最も高い割合であった。しかしながら、表2、表3における小学6年生、中学1年生の結果をみると、“言葉の問題”は1.0%、0.0%の結果であり、年齢が上がるにつれて減少することが推測される。

次いで多かったADHD等の行動面の問題、発達全般の遅れの問題についても同様に、R1年度の小学6年、中学1年と年齢が上がるに連れて減少傾向がみられる。

しかしながら、自閉症等の行動面の問題を有する子どもの割合は、小1、小6、中1においていずれも4%台であった。また、R1年度の受診の割合をみると、小学1年生よりも中学1年生の方が高い結果であった。母集団が異なるため、一概に比較することは出来ないが、自閉症特性である対人関係やこだわり等の問題は、年齢が上がっても

変化しづらく、継続的な支援が必要とされることが推測された。

・反抗挑戦性障害の特性のある子どもについて

反抗挑戦性障害の特性がみられた子どもは、小学1年生1.7%、小学6年生0.3%、中学1年生1.1%であり、発達障害の種別は「自閉症」、「ADHD」、「全体的な発達の遅れ」、「境界域知能」と多項目に渡る。医療機関の受診については、小学校1年生では、未受診の子どもが2名いたが、小学6年生、中学1年生では全て医療機関を受診していた。行動面など、明らかな問題がみられる場合には、学年が上がるにつれて医療機関につながりやすいことが考えられる。

2) 学校における教育的配慮について

・担任による配慮のみの子どもの特徴と対応

表13の学校における支援内容の内訳を見ると、「学級担任による配慮のみ」の割合は、小学1年生12.2%、小学6年生5.7%、中学1年生4.3%の結果であり、支援内容の中で最も高い割合を示した。学級担任による配慮のみに該当する子どもの特徴と対応方法について自由記述で回答を得た結果については、表15の通りである。個々に異なる内容が記されているが、学年ごとにみると、小学1年生では集団行動、集団活動への参加が課題となり、個別の配慮を要する内容となっていた。小学6年生では、不登校傾向や学習の難しさ、人間関係のトラブルなどに関する内容であった。中学1年生では、コミュニケーションや対人関係トラブル等の障害特性に加え、家庭環境、震災の

影響など問題が上げられた。

年齢と共に問題が複雑化しており、障害特性への配慮よりも、2次的障害や問題に対する支援へと移行している様子が見られる。「担任の配慮のみ」についての詳細な情報の収集と対策を検討することが必要である。

・医療機関未受診の子どもについて

発達の偏りや遅れはあるが医療機関を受診していない子どもの特徴として、家族の理解や保護者のメンタルヘルス等が特徴として多く上げられた。小学6年生や中学1年生では、学習面の問題がみられはじめ、通級指導教室やスクールカウンセラーの利用、合理的配慮の検討が行われていた。家族形態の多様化、震災後の影響から生活基盤が安定しないという回答もみられ、日常生活の困難さが強く感じられるケースについても学校内で問題を抱えている状況もみられる。地域の支援機関との連携など、地域で支える支援体制づくりが求められる。

・震災後のメンタルヘルスカアの必要な子どもの人数と割合

震災後のストレスから専門的な心のケアが必要と感じる子どもの人数と割合(表14参照)は、小学1年生は2.8%、小学6年生は3.1%、中学1年生は10.2%の結果であり、中学1年生の支援ニーズの高さが顕著であった。H23年の東日本大震災発災当時、5歳児であり、避難で入学を迎えた子どもも少なくないことが推測される。避難、帰還に伴い、何度も生活環境が変化していることが推測される。発達の偏りや遅れにかかわらず、子ども全体における避難の影響を

踏まえ、長期的に心のケアを行うことの重要性が示唆された。

E. まとめ

小学1年生の定点調査では、R1年度小学1年生の発達の偏りや遅れのある子どもの割合が26.0%（「境界域知能」を除く）であり、H25年度からの定点観測を行う中で最も高い割合となった。内訳をみると、“言葉の問題”を有する子どもが約8%と最も高い割合を示した。H18年度生まれの追跡調査では、発達の偏りや遅れのある子どもの割合はR1年中学1年生が10.7%であり、前年度と比較すると減少傾向がみられた。R1年度の学年別の結果では、自閉症の特性を持つ子どもの割合はいずれも約5%であり、他の障害特性のように学年が上がるにつれて減少傾向を示しにくい、つまり年齢にかかわらず障害特性が確認されやすいことが明らかとなった。

医療機関の受診については、震災に起因する避難等の影響や家族の理解、保護者のメンタルヘルス等、問題が重複しており、学校だけで問題を抱えることなく、地域の支援機関との連携も踏まえた支援体制づくりが必要である。

F. 研究発表

1) 論文発表 なし

2) 学会発表

・小学校における発達の気になる子どもの実態とその支援に関する研究～東日本大震災後の福島県沿岸部における6年間の調査結果から～川島慶子, 内山登紀夫. 第54回日本発達障害学会ポスター発表.2019.8

G. 知的財産権の出願・登録状況

1) 特許取得 なし

2) 実用新案登録 なし

3) その他 なし

<参考・引用文献>

1)発達障がいの可能性のある児童生徒を含む特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査報告書.福島県教育委員会.平成30年度 未来へつなぐ子育て・教育充実事業「発達障がい児童生徒調査研究事業」.2019.3

2)内山登紀夫,川島慶子,中村志寿佳,福留さとみ.福島県浜通りにおける発達障害の気づきと支援に関する研究(いわき市・南相馬市).発達障害児者等の地域特性に応じた支援ニーズとサービス利用の実態の把握と支援内容に関する研究.障害者政策総合研究事業(身体・知的等障害分野).平成29年度総括・分担研究報告書.研究代表者本田秀夫.2018.3

3)内山登紀夫,川島慶子.福島県浜通りにおける発達障害の気づきと支援に関する研究(南相馬市).発達障害児者等の地域特性に応じた支援ニーズとサービス利用の実態の把握と支援内容に関する研究.障害者政策総合研究事業(身体・知的等障害分野).平成28年度総括・担研究報告書.研究代表者本田秀夫.2017.3

4)内山登紀夫,川島慶子,鈴木さとみ.福島県浜通りにおける発達障害の気づきと支援に関する研究(南相馬市).発達障害児とその家族に対する地域特性に応じた継続的な支援の実施と評価.障害者政策総合研究事業(身体・知的等障害分野).平成27年度総括・分担研究報告書.研究代表者本田秀夫.

夫.2016.3

5)内山登紀夫,鈴木さとみ,川島慶子.福島県
浜通りにおける発達障害の気づきと支援に
関する研究 2.発達障害児とその家族に対
する地域特性に応じた継続的な支援の実施
と評価. 障害者政策総合研究事業(身体・知
的等障害分野).平成 26 年度総括・分担研
究報告書.研究代表者本田秀夫.2015.3

表1 発達の偏りや遅れのある子どもの人数と割合 R1小学1年生 n=288(男=135,女=153)

主たる問題	総数(受診・未受診の合計)						医療機関受診あり						医療機関未受診					
	男		女		計		男		女		計		男		女		計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
対人関係やこだわりなどの問題(自閉症等)	14	4.9%	12	8.9%	2	1.3%	7	2.4%	7	5.2%	0	0.0%	7	2.4%	5	3.7%	2	1.3%
落ち着がない、そっかしい等の問題(ADHD等)	18	6.3%	16	11.9%	2	1.3%	9	3.1%	8	5.9%	1	0.7%	9	3.1%	8	5.9%	1	0.7%
言葉を理解すること話すことの問題(構音障害等)	23	8.0%	10	7.4%	13	8.5%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	23	8.0%	10	7.4%	13	8.5%
学力の問題(LD等)	5	1.7%	1	0.7%	4	2.6%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	5	1.7%	1	0.7%	4	2.6%
発達全体の遅れ(精神遅滞等)	12	4.2%	7	5.2%	5	3.3%	3	1.0%	2	1.5%	1	0.7%	9	3.1%	5	3.7%	4	2.6%
その他何らかの精神的なケアを要する(チック、緘黙等)	3	1.0%	1	0.7%	2	1.3%	1	0.3%	0	0.0%	1	0.7%	2	0.7%	1	0.7%	1	0.7%
境界域知能	7	2.4%	1	0.7%	6	3.9%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	7	2.4%	1	0.7%	6	3.9%
計	82	28.5%	48	35.6%	34	22.2%	20	6.9%	17	12.6%	3	2.0%	62	21.5%	31	23.0%	31	20.3%

表2 発達の偏りや遅れのある子どもの人数と割合 R1小学6年生 n=385(男=194,女=191)

主たる問題	総数(受診・未受診の合計)						医療機関受診あり						医療機関未受診					
	男		女		計		男		女		計		男		女		計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
対人関係やこだわりなどの問題(自閉症等)	18	4.7%	14	7.2%	4	2.1%	10	2.6%	8	4.1%	2	1.0%	8	2.1%	6	3.1%	2	1.0%
落ち着がない、そっかしい等の問題(ADHD等)	16	4.2%	14	7.2%	2	1.0%	4	1.0%	3	1.5%	1	0.5%	12	3.1%	11	5.7%	1	0.5%
言葉を理解すること話すことの問題(構音障害等)	4	1.0%	3	1.5%	1	0.5%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	4	1.0%	3	1.5%	1	0.5%
学力の問題(LD等)	4	1.0%	2	1.0%	2	1.0%	1	0.3%	0	0.0%	1	0.5%	3	0.8%	2	1.0%	1	0.5%
発達全体の遅れ(精神遅滞等)	3	0.8%	0	0.0%	3	1.6%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	3	0.8%	0	0.0%	3	1.6%
その他何らかの精神的なケアを要する(チック、緘黙等)	9	2.3%	4	2.1%	5	2.6%	1	0.3%	0	0.0%	1	0.5%	8	2.1%	4	2.1%	4	2.1%
境界域知能	6	1.6%	2	1.0%	4	2.1%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	6	1.6%	2	1.0%	4	2.1%
計	60	15.6%	39	20.1%	21	11.0%	16	4.2%	11	5.7%	5	2.6%	44	11.4%	28	14.4%	16	8.4%

表3 発達の偏りや遅れのある子どもの人数と割合 R1中学1年生 n=373 (男=193,女=180)

主たる問題	総数(受診・未受診の合計)						医療機関受診あり						医療機関未受診					
	男		女		計		男		女		計		男		女		計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
対人関係やこだわりなどの問題(自閉症等)	18	4.8%	14	7.3%	4	2.2%	16	4.3%	12	6.2%	4	2.2%	2	0.5%	2	1.0%	0	0.0%
落ち着がない、そっかしい等の問題(ADHD等)	8	2.1%	8	4.1%	0	0.0%	8	2.1%	8	4.1%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
言葉を理解すること話すことの問題(構音障害等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
学力の問題(LD等)	4	1.1%	3	1.6%	1	0.6%	2	0.5%	1	0.5%	1	0.6%	2	0.5%	2	1.0%	0	0.0%
発達全体の遅れ(精神遅滞等)	6	1.6%	4	2.1%	2	1.1%	4	1.1%	3	1.6%	1	0.6%	2	0.5%	1	0.5%	1	0.6%
その他何らかの精神的なケアを要する(チック、緘黙等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
境界域知能	4	1.1%	4	2.1%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	4	1.1%	4	2.1%	0	0.0%
計	40	10.7%	33	17.1%	7	3.9%	30	8.0%	24	12.4%	6	3.3%	10	2.7%	9	4.7%	1	0.6%

表4 反抗挑戦性障害の特性のある子どもの人数と割合 R1小学1年生 n=288(男=135,女=153)

主たる問題	反抗挑戦性障害の特性のある子ども						医療機関受診あり						医療機関受診なし					
	総計		男		女		計		男		女		計		男		女	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
対人関係やこだわりなどの問題(自閉症等)	5	1.7%	4	3.0%	1	0.7%	3	1.0%	3	2.2%	0	0.0%	2	0.7%	1	0.7%	1	0.7%
落ち着がない、そっかしい等の問題(ADHD等)	2	0.7%	1	0.7%	1	0.7%	2	0.7%	1	0.7%	1	0.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
言葉を理解すること話すことの問題(構音障害等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
学力の問題(LD等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
発達全体の遅れ(精神遅滞等)	1	0.3%	1	0.7%	0	0.0%	1	0.3%	1	0.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
その他何らかの精神的なケアを要する(チック、緘黙等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
境界域知能	1	0.3%	0	0.0%	1	0.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.3%	0	0.0%	1	0.7%
計	9	3.1%	6	4.4%	3	2.0%	6	2.1%	5	3.7%	1	0.7%	3	1.0%	1	0.7%	2	1.3%

表5 反抗挑戦性障害の特性のある子どもの人数と割合 R1小学6年生 n=385(男=194,女=191)

主たる問題	反抗挑戦性障害の特性のある子ども						医療機関受診あり						医療機関受診なし					
	総計		男		女		計		男		女		計		男		女	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
対人関係やこだわりなどの問題(自閉症等)	1	0.3%	1	0.5%	0	0.0%	1	0.3%	1	0.5%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
落ち着がない、そっかしい等の問題(ADHD等)	1	0.3%	1	0.5%	0	0.0%	1	0.3%	1	0.5%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
言葉を理解すること話すことの問題(構音障害等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
学力の問題(LD等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
発達全体の遅れ(精神遅滞等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
その他何らかの精神的なケアを要する(チック、緘黙等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
境界域知能	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
計	2	0.5%	2	1.0%	0	0.0%	2	0.5%	2	1.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

表6 反抗挑戦性障害の特性のある子どもの人数と割合 R1中学1年生 n=373(男=193,女=180)

主たる問題	反抗挑戦性障害の特性のある子ども						医療機関受診あり						医療機関受診なし					
	総計		男		女		計		男		女		計		男		女	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
対人関係やこだわりなどの問題(自閉症等)	4	1.1%	4	2.1%	0	0.0%	4	1.1%	4	2.1%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
落ち着がない、そっかしい等の問題(ADHD等)	3	0.8%	3	1.6%	0	0.0%	3	0.8%	3	1.6%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
言葉を理解すること話すことの問題(構音障害等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
学力の問題(LD等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
発達全体の遅れ(精神遅滞等)	1	0.3%	0	0.0%	1	0.6%	1	0.3%	0	0.0%	1	0.6%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
その他何らかの精神的なケアを要する(チック、緘黙等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
境界域知能	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
計	8	2.1%	7	3.6%	1	0.6%	8	2.1%	7	3.6%	1	0.6%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

表7 素行障害の特性のある子ども R1小学1年生 n=288(男=135,女=153)

主たる問題	素行障害の特性のある子ども						医療機関受診あり						医療機関受診なし					
	総計		男		女		計		男		女		計		男		女	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
対人関係やこだわりなどの問題(自閉症等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
落ち着がない、そっかしい等の問題(ADHD等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
言葉を理解すること話すことの問題(構音障害等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
学力の問題(LD等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
発達全体の遅れ(精神遅滞等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
その他何らかの精神的なケアを要する(チック、緘黙等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
境界域知能	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
計	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

表8 素行障害の特性のある子ども R1小学6年生 n=385(男=194,女=191)

主たる問題	素行障害の特性のある子ども						医療機関受診あり						医療機関受診なし					
	総計		男		女		計		男		女		計		男		女	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
対人関係やこだわりなどの問題(自閉症等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
落ち着がない、そっかしい等の問題(ADHD等)	1	0.3%	1	0.5%	0	0.0%	1	0.3%	1	0.5%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
言葉を理解すること話すことの問題(構音障害等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
学力の問題(LD等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
発達全体の遅れ(精神遅滞等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
その他何らかの精神的なケアを要する(チック、緘黙等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
境界域知能	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
計	1	0.3%	1	0.5%	0	0.0%	1	0.3%	1	0.5%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

表9 素行障害の特性のある子ども R1中学1年生 n=373 (男=193,女=180)

主たる問題	素行障害の特性のある子ども						医療機関受診あり						医療機関受診なし					
	総計		男		女		計		男		女		計		男		女	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
対人関係やこだわりなどの問題(自閉症等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
落ち着がない、そっかしい等の問題(ADHD等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
言葉を理解すること話すことの問題(構音障害等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
学力の問題(LD等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
発達全体の遅れ(精神遅滞等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
その他何らかの精神的なケアを要する(チック、緘黙等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
境界域知能	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
計	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

表10 不登校の子どもの人数と割合 R1小学1年生 n=288(男=135,女=153)

主たる問題	不登校					
	計		男		女	
	人数	%	人数	%	人数	%
対人関係やこだわりなどの問題(自閉症等)	1	0.3%	1	0.7%	0	0.0%
落ち着がない、そっかしい等の問題(ADHD等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
言葉を理解すること話すことの問題(構音障害等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
学力の問題(LD等)	1	0.3%	0	0.0%	1	0.7%
発達全体の遅れ(精神遅滞等)	1	0.3%	1	0.7%	0	0.0%
その他何らかの精神的なケアを要する(チック、緘黙等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
境界域知能	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
計	3	1.0%	2	1.5%	1	0.7%

表11 不登校の子どもの人数と割合 R1小学6年生 n=385(男=194,女=191)

主たる問題	不登校					
	計		男		女	
	人数	%	人数	%	人数	%
対人関係やこだわりなどの問題(自閉症等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
落ち着がない、そっかしい等の問題(ADHD等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
言葉を理解すること話すことの問題(構音障害等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
学力の問題(LD等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
発達全体の遅れ(精神遅滞等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
その他何らかの精神的なケアを要する(チック、緘黙等)	1	0.3%	0	0.0%	1	0.5%
境界域知能	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
計	1	0.3%	0	0.0%	1	0.5%

表12 不登校の子どもの人数と割合 R1中学1年生 n=373 (男=193,女=180)

主たる問題	不登校					
	計		男		女	
	人数	%	人数	%	人数	%
対人関係やこだわりなどの問題(自閉症等)	3	0.8%	3	1.6%	0	0.0%
落ち着がない、そっかしい等の問題(ADHD等)	1	0.3%	1	0.5%	0	0.0%
言葉を理解すること話すことの問題(構音障害等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
学力の問題(LD等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
発達全体の遅れ(精神遅滞等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
その他何らかの精神的なケアを要する(チック、緘黙等)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
境界域知能	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
計	4	1.1%	4	2.1%	0	0.0%

表13 教育において配慮や支援が必要な子どもの人数と割合

支援内容	R1小学1年生 n=287(男=135,女=152)				R1小学6年生 n=384(男=193,女=191)				R1中学1年生 n=368(男=189,女=179)										
	計		男		女		計		男		女		計		男		女		
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	
A. 特別支援学級に在籍	6	2.1	5	3.7	1	0.7	6	1.6	4	2.1	2	1.0	7	1.9	4	2.1	3	1.7	
(1) 知的障害特別支援学級総数	1	0.3	1	0.7	0	0.0	5	1.3	5	2.6	0	0.0	4	1.1	3	1.6	1	0.6	
(2) 自閉症・情緒障害特別支援学級総数	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.3	1	0.5	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
(3) その他の特別支援学級総数	6	2.1	5	3.7	1	0.7	2	0.5	0	0.0	2	1.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
(1) 情緒障害通級指導教室に通級	22	7.7	11	8.1	11	7.2	2	0.5	1	0.5	1	0.5	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
(2) 難聴・言語障害通級指導教室に通級	1	0.3	1	0.7	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
(3) その他の通級指導教室に通級	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.3	0	0.0	1	0.5	2	0.5	2	1.1	0	0.0	
(4) 適応指導教室((1)~(3)通級児を除く)	10	3.5	4	3.0	6	3.9	4	1.0	2	1.0	2	1.0	2	0.5	2	1.1	0	0.0	
(5) その他の支援	35	12.2	17	12.6	18	11.8	22	5.7	14	7.3	8	4.2	16	4.3	14	7.4	2	1.1	
(6) 学級担任による配慮のみ																			

表14 震災後のメンタルヘルスケアの必要な子ども的人数と割合

内容	R1小学1年生 n=288(男=135,女=153)				R1小学6年生 n=385(男=194,女=191)				R1中学1年生 n=373 (男=193,女=180)									
	計		男		女		計		男		女		計		男		女	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
①震災後のストレスから専門的な心のケアが必要と感じる児	8	2.8	4	3.0	4	2.6	12	3.1	7	3.6	5	2.6	38	10.2	24	12.4	14	7.8
②このうち、SCの面接を受けたことがある児	6	2.1	2	1.5	4	2.6	0	0.0	0	0.0	0	0.0	23	6.2	11	5.7	12	6.7
③ ①の児のうち、医療機関を受診したと把握している児	3	1.0	3	2.2	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	11	2.9	11	5.7	0	0.0

表 15 学級担任による配慮のみの子どもの特徴と支援内容

Q1.「学級担任による配慮のみ」の項目に該当するお子さんの特徴と配慮事項について、可能な範囲でご記入ください。

学年	特徴・対応	内容
小 1	特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・学習等準備に時間がかかる。 ・切りかえが遅い。 ・指示が1回で理解できない。 ・同学年児とのコミュニケーションをとることが難しい。 ・思ったことをそのまま口にしてしまうためトラブルが多い。 ・自分の間違いをみとめたくない。 ・注意されると聞かないふり、かんしゃくなどがみられる。 ・自分の思い通りにならないと、あばれたりいじけたりする。 ・指示された内容の意味が理解できず、イライラしてうなり声をあげたり固まってしまう。 ・知的な遅れがあるが、家族の理解が得られず通常学級で対応している。 ・一斉指導では課題に取り組めないで力もつかない状態である。 ・気分にもうがあり、情緒が安定しない。 ・学習に集中できない。 ・場面緘黙で困ってもヘルプサインが出せない。 ・吃音がある。 ・家庭環境の問題があり、年齢相応の様々な経験が不足しているように思う。 ・人前で発表することを拒否し、朝の会の司会なども難しい。 ・こだわりが強く、自閉症的な傾向が見られる。 ・授業中、失敗すると泣き出し、その後の参加が難しくなる。 ・家庭では、多動や自己否定的な発言がみられる(学校ではそのような様子は見られない)。
	対応	<ul style="list-style-type: none"> ・指示をする前に注意喚起する ・個別に声かけをする。(2件) ・視覚的に補えるものを活用して指導する。 ・グループ活動など子ども主体の活動の時には必ずそばで見守る。 ・言うてはいけないことを口にしてしまうため、その都度指導している。 ・内容が分かるように簡単にわかりやすく伝えたり、担任と一緒に活動を行う。 ・担任の近くに席をおき、度々声をかけたり目や手をかけたりする。 ・離席をみのがさず、窓をあける、プリントを配るなど意味のある動きを許可している。 ・教育的に無視したり、全体に理解を促したりする。 ・話を理解する力はあるので、落ち着いて取り組むよう時々声をかけたり、やり直しさせたりしている。 ・吃音について、自発的な発言も多くみられるため、見守っている。 ・知らない言葉が多いのでその都度説明し、個別指導をして理解するよう支援している。 ・失敗してもよいことを伝え、自信を持って取り組むように励ます。
小 6	特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・不登校の傾向がある。(2件) ・発音の不明瞭さがある。(例:力行→タ行) ・学習等に集中できない、指示が入りにくい。 ・友人関係において、人の気持ちを考えたり想像したりすることが苦手。 ・記憶が持続しない。 ・学力が低い。 ・対人関係でも度々トラブルがある。人との物理的距離感がつかめない。 ・吃音がある。ぼんやりしている。 ・気分のまま動き、落ちつきがない。 ・ぼんやりしている、集中力が持続しない、周囲を気にしない発言をする。 ・多動傾向があり、集団行動では出遅れてしまう。 ・整理整頓が苦手。
	対応	<ul style="list-style-type: none"> ・視覚的支援、注意喚起を促す。 ・個別の声かけをする。(2件) ・個別支援をして課題に取り組ませている。 ・許容範囲を示し、共感的に理解すると落ちつくことができる。 ・必要に応じて個別的の指導をしている。

学年	特徴・対応	内容
中1	特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒数の減少から人間関係の固定化、男女の人数のアンバランスがあり、避難先でなじめず戻ってきた。 ・家庭環境の問題も重複している。 ・震災の直接的な影響よりも、二次的・間接的な影響を大きく受けている。 ・自閉症スペクトラムの傾向がある。 ・相手の表情や場の空気を読むことが難しく、コミュニケーションを上手にとることが苦手である。相手の気持ちを考えて行動できず、攻撃的になったりする。 ・自分に都合の悪い事は忘れてしまう。 ・落ち着きがなくこだわりが強いいため、他人とコミュニケーションがとれない。 ・自分の考えを書く活動は非常に苦手で、机に伏したり手遊びをはじめめる。(話し合いをしたり発表をしたりする授業への取り組みは良好) ・一斉指導の際、何を指示されたのか伝わらないことがある。
	対応	<ul style="list-style-type: none"> ・教室に入るのが困難で保健室またはその他の教室を準備し、そこで個別に学習を進めている(担任、学年主任、養護教諭がかかわる)。 ・トラブルが生じやすいので様子を見ている必要がある。 ・トラブルが生じた場合は、その場でもしくはその日のうちに解決するようにする。 ・対人関係のトラブルで相手と話がくい違ふことがあり、(本人の言葉や気持ちを受け止めた上で)周囲からの話を聞いてた状況を把握している。 ・保護者、本人に対し、スクールカウンセラーがカウンセリングを行っている。 ・トラブルになりそうなときに、言葉の理解に関する支援や人間関係が円滑にいくように支援している。 ・支援員などが個別に声をかけている。

表 16 医療機関を受診していない子どもの特徴と対応

Q2.「発達の偏りや遅れがあるが、医療機関を受診していない子ども」について、お気づきの点がありましたら、可能な範囲でご記入ください。(教育における課題や問題点、必要とする支援、取り組んでいる支援、子どもの特徴、家族背景、震災の影響等)

学年	内容
小1	<ul style="list-style-type: none"> ・障がいによるものなのか、生活経験が少ないからなのか、1年生の段階で判断するのが難しい。 ・子どもは集団場面でのトラブルが多く、保護者はメンタルヘルスの不安定さがあり、震災後に悪化している。 ・早生まれであることから、発達面の偏りや遅れについて家族が理解しにくい。 ・入学後、2学期になり他の子が落ち着いてきたため、行動が目立つようになった。 ・算数が好きで理解力もあるが、国語や絵を描くことが苦手。 ・学校での集団生活では困り感がみられるが、家庭では必要性が感じにくく、受診までに至らない。 ・震災後家庭教育の低下を感じている。家庭での児童の特性の捉えにくさがある。 ・校内全体で特別支援教育への共通理解、合理的配慮の推進を行う必要がある。
小6	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭との連携がうまく進むよう、適宜連絡を取り合うとともに、教育相談等を実施しているが保護者の理解が得にくい。 ・家庭環境が多様化している(離婚・再婚の繰り返し。結婚はせずパートナーとして。外国人の保護者(片方/母)等の増加。) ・苦手な教科は放課後や休み時間に個別指導を行っている。 ・子どもの特性を理解しているが、医療の必要性は感じていない。 ・学習や生活面で、新奇なことへの抵抗が強いため、行事や特別な活動の前は時間をとって説明している。 ・集団登校できず、毎日遅刻している。偏食やその他感覚面の偏りの強さがあり、日常生活動作が十分にできない。(入浴、洗髪、歯磨き、排せつ等) ・震災の影響により、引っ越しと転校を経験。家庭環境の不安定さがある。
中1	<ul style="list-style-type: none"> ・英語の読み書きにおいて困難がある。 ・校内での通級指導を利用している。SCによる学習方法のアドバイスを受けている。 ・家族はそれほど大きな問題として捉えていないが、SCと母親との話し合い(カウンセリング)を通して支援の必要性を伝えている。 ・SCの助言により合理的配慮の提案を検討している。 ・家族が高校進学を希望しているため、知的な遅れがあるものの支援学級の利用には至っていない。基礎的な学力を身につけさせることが難しい状態。 ・ひとり親家庭であり、家では1人で過ごし、他者との関わりがない。

表 17 H18 年度生まれの子どもの追跡調査の結果

(学校における発達の偏りや遅れのある子どもの割合)

年度：学年	受診・未受診の合計 (%)	受診あり (%)
H25 : 小 1 (n=233)	18.9%	7.7%
H26 : 小 2 (n=281)	10.0%	5.0%
H27 : 小 3 (n=331)	11.8%	5.1%
H28 : 小 4 (n=339)	15.6%	4.7%
H29 : 小 5 (n=338)	16.3%	8.9%
H30 : 小 6 (n=369)	13.6%	7.3%
R1 : 中 1 (n=373)	9.7%	8.0%

※H28 年度以降に加えた項目「境界域知能」を除外して算出した。

表 18 小学 1 年生の定点調査の結果

(学校における発達の偏りや遅れのある子どもの割合)

年度：学年	受診・未受診の合計 (%)	受診あり (%)
H25 : 小 1 (n=233)	18.9%	7.7%
H26 : 小 1 (n=241)	17.4%	7.1%
H27 : 小 1 (n=320)	19.1%	3.8%
H28 : 小 1 (n=336)	20.2%	5.1%
H29 : 小 1 (n=317)	17.7%	3.8%
H30 : 小 1 (n=326)	15.6%	4.0%
R1 : 小 1 (n=288)	26.0%	6.9%

※H28 年度以降に加えた項目「境界域知能」を除外して算出した。

表 19 小学 6 年生の定点調査の結果 (発達の偏りや遅れのある子どもの割合)

(学校における発達の偏りや遅れのある子どもの割合)

年度：学年	受診・未受診の合計 (%)	受診あり (%)
H25 : 小 6 (n=322)	9.6%	5.9%
H26 : 小 6 (n=367)	12.0%	6.8%
H27 : 小 6 (n=385)	11.4%	4.4%
H28 : 小 6 (n=394)	9.4%	4.3%
H29 : 小 6 (n=396)	14.6%	8.3%
H30 : 小 6 (n=369)	13.6%	7.3%
R1 : 小 6 (n=385)	14.0%	4.2%

※H28 年度以降に加えた項目「境界域知能」を除外して算出した。